
純潔であること

羽ボボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純潔であること

【Zコード】

Z3557W

【作者名】

羽ボボ

【あらすじ】

この世界に生きている、生きていく、というのは、とても辛い事だと思う。総てが掛け替えのない物だから、余計、僕たちは迷いながら進まなければならなくなる。

だがまあ、それはそれで、というより、だからこそ、面白いのだ。掛け替えのない物の中からどれを大事に取り出すか、それはきっと、その人次第なのだから。

注意：八千文字程度の連作短編、もしくは只の短編小説をアップ

するために作りました。作品事に異なるストーリーとなりますので、連載物をご希望の方は「」容赦ください。

お願い：誤字脱字、その他不明な点については「」連絡頂ければ幸いです。よろしくお願いします。

千秋は白く凍りついた吐息を押しのけるように階段を駆け登った。手前から二三つの薄汚れたドアを開けて中へと飛び込むと、さびた蝶番の甲高い悲鳴が、彼女を出迎えた。

部屋の中は外と同じくらい寒く、外よりもずっと暗かった。千秋は一つ大きく息を吐くと、後ろ手にそっと扉を閉めた。いつもと変わらないその小暗さが、彼女には心地好く感じられた。

彼女はそのまま滑るように廊下を進み、立ち塞がるようにして行く手を阻んでいた扉を開け、雑多にモノが積まれ、まるで倉庫のようになってしまっている居間へと足を踏み入れた。

「また君か」どこと無く疲れたような声が掛けられた。千秋がそちらを向くと、穏やかな笑顔を浮かべた彼がそこに居た。「よくもまあ、こんな所に何度も来るものだね」

「また私です」千秋もつられたように笑い、言つた。「一週間ぶりですね、荻野さん」

千秋と荻野の出会いは、まだ太陽が地面を焼いていた数ヶ月前の事だった。彼女は夏休みを使って小遣い稼ぎでもしようと、知り合いの古本屋で店番をしていた。客の殆ど来ない小さな店で、夏旅行の間を頼まれていた。

元來本を良く読む性分だった訳でもなく、時間を持て余すだけだった千秋はカウンターに座つたまま、時の流れに逆らつように意識をどこかへと馳せさせていた。

明確な何かを考えていた訳ではない。今日の夕飯は何だとか、昨夜見たドラマはどうだとか、そういう徒事を考えては、時間を潰していた。思考が一年前に見たテレビのニュースにまで差し掛かつたとき、入り口の扉の開く音で千秋の意識は漸く身体を取り戻した。

慌てて振り向くと、最初にくたびれたロングコートが目に入り、それから一人の男性が泰然と辺りを見渡しているのが見えた。千秋が彼に抱いたのは、こんな真夏日にする格好ではないな、という程度のこれまた他愛のない考えだった。

男性は一通り視線を巡らし終えると、満足そうに頷いてカウンタに座る千秋に目を移した。千秋はどきりと心臓が高鳴ったのを感じた。

「……い、いらっしゃいませ」相応しい筈の言葉が場違いに響いた気がした。

その日から男性は毎日のように古本屋へとやつてきた。最初見たときと変わらない厚手のロングコートを羽織って、毎回何度も頷いては、本を買うわけでもなく、たくさんの本を眺めて歩いていた。何時じろからか、千秋は男性と言葉を交わすようになっていた。荻野正義、彼はそう名乗つて顔をしかめるように笑つた。

「また貴方ですか」退屈な時間は細やかな会話の場と成つた。「毎日毎日、よく飽きませんね。一冊くらい買ってつたらどうですか」笑いながらそういう千秋に、荻野は苦笑で返した。「こここの本は大体、読んだことがあつてね」

「へえ、凄いですね。本、好きなんですか」

「嫌いでは、ないよ」荻野は暑そうにロングコートの裾をパタパタと動かした。それから、千秋の座るカウンターの上を眺めた。白い彼女の手以外の物は、何も置かれていなかつた。「君は……本は読まないのかい」

荻野の視線を追つて自分の掌を見て、今度は千秋が苦笑した。「嫌いじゃあ、ないんですけどね」彼女は手持ち無沙汰に両の手を組ませるのだった。

翌日、荻野は古本屋へ来なかつた。千秋は何となく自分の手元に視線を落とした。白く小さな二つの手、それだけがそこにあつた。その日、千秋は古本屋で初めて本を手に取つた。内容は、余り頭には入つてこなかつた。

一週間ほど、千秋は荻野の来ない時を読書にあてて過ごした。一日間は彼が来ることを期待しながら、三日目にはもう来ないのだと落胆して、五日目からはただ闇雲に本を繰っていた。

本の中の住人たちはどうな時でも起きて動いていた。そこには確かに人生があった。怒りも悲しみも喜びも、そして絶望も希望もあった。彼らは彼らが持ちうるすべての物を使って命を燃やしていた。そこに千秋の介在する余地は欠片も無く、彼女はそのことが酷く悲しいことのように思えた。

一層のめりこむ様に、千秋は本を繰つていった。世界から音が消えていき、本中の文字が容貌かたちを持つて動き始めた。ある文字は叫び、ある文字は不気味な声で彼女を呼んだ。千秋はいつの間にか、呼吸することすら忘れていた。

「怪物と戦う者は、その際自分が怪物にならぬよう口氣をつけなければならない。深淵をのぞくとき、深淵もまた、こちらをのぞいているのだ」

不意にかけられた声に千秋はハツと息をのんで入り口を見やつた。いつも通りの黒いロングコートを羽織った荻野が、顔をしかめて立っていた。千秋は手元の本と彼とを交互に見て、焦つたように口を開いた。文字はもう動いてはいなかつた。

「あ、えっと、久しぶりですね」

「うん。久しぶりだね」

答えた荻野はいつもの苦笑のような笑顔を浮かべていた。彼は落ち着き払つた足取りでカウンターの前に立つて、千秋の読んでいた本を覗きこんだ。自分の心を覗きこまれているような気がして、千秋は少し恥ずかしくなつた。

荻野はページの最初の数行に目を通すと、大方の内容を察したらしかつた。僅かに目を見開いて、千秋の顔をしげしげと見つめた。ただ、その顔はどこか微笑んでいるようでもあつた。

「本は、読まないんじゃなかつたのかい」

やはり心を読まれたようで、千秋はぶつきら棒に口を開いた。

「嫌いじゃがないって、言つたんですよ」

荻野は一瞬呆けたような顔をした。それから、声をあげて笑つた。千秋は今度こそ気恥ずかしさに顔を逸らしていた。

「すまなかつた。しかし、君も存外、小洒落ているね」一頬り笑うと、荻野はそう言って口元に手を当てた。それから何事か呟いたようだつたが、千秋には聞こえなかつた。

「その事はもう良いです」彼女は噛み付くように言つた。「それより、さつきのあれ、深淵がどうのつて、何ですか」

「あれかい。あれはフリードリヒ・ニーチェの言葉だよ。謎の狂氣に苛まれた、十九世紀最大の哲学者の一人さ」荻野はそこで、一つ息をついた。

「君も、本に興味を抱くのは良いけれど、あまり溺れ過ぎてはいけないよ。本は素晴らしいが、それゆえに危険だ。一度飲み込まれると、抜け出すのには大変な労力が要る」「……本に飲み込まれる、ですか」

千秋の脳裏に、踊り狂う文字の姿とそれを一心不乱に追いかける自分の姿とが浮かんできた。あれが、飲み込まれる、という事なのだろうと漠然と理解した。千秋はぶるりと身震いをして、突如として襲ってきた寒気を振り払うように荻野に尋ねた。

「そういえば、何で一週間も来なかつたんですか。どつかで野垂れ死んじやつてるのかと思つてましたよ」

「野垂れ死ぬ、ね」荻野が呆れたような顔で千秋を見た。「君は少し口が横柄だね。最近の学生は皆こいつ感じなのかい」

千秋はふと今日の荻野が先日よりも表情に富んでいることに気が付いた。だからどうという訳ではないが、千秋はそれが何処となく嬉しかつた。そんなことを嬉しいと感じている自分が、不思議だつた。

それからというもの、千秋は彼とちょっとした事を話すようになつた。そうは言つても彼は世事に疎かつたので、盛り上гарる事はそうなかつた。一つだけ彼が強く食いついた話題も、十九世紀か

ら二十世紀にかけての哲学がどうの、という千秋には珍紛漢紛な代

物だけだった。彼女に分かったのは、彼が哲学者の中で特に二ーチエを好んでいて、その表現を多用するということくらいだった。

「二ーチエは、」と、彼は時おり、このようにして話し始めた。ツアラトウストラという架空の人物を通して、超人という人間が到達すべき境地について語っている。この超人というのは、簡単に言えば自分の中で自分の存在の意味等の新しい価値観を創造できるような人間のこと……」

こうなった時の彼は飛行船に憧れる少年の瞳を持っていて、千秋にはどうしたって止めることは出来なかつた。むしろ、嬉々として語る彼を見ている時間は、彼女には楽しみでさえあつた。

古本屋で過ごす日々はそのようにして過ぎて行つた。そして、八月も中盤に差し掛かつたある日の事だつた。

「千秋くん」荻野が空中を睨むようにしながら口を開いた。「今度の日曜日に祭りがあるだろう。一緒に行かないか？」

「祭りって、私ですか？」

「僕が知つてる千秋くんは、一人しか居ないけどね」「別に良いんですけど」千秋は肩を竦めると、言つた。「流石にそのコートは脱いで来て下さいね。見てるこっちが暑苦しいですから」中空を見据えたまま、荻野は少し難しい顔をした。それから、小さく返事をして、また何事かを呟いた。何を言つたのかはやはり千秋には分からなかつた。

祭りの当日、荻野はロングコートを羽織つてはいなかつた。そのままどこにでも行けそうな普段着といった出で立ちだつた。

「何だか、味氣ない恰好ですね。仮にも女の

子とお祭りに行くんですから、少しくらいめかし込んだらどうですか

か

「そういうのは、どうも苦手なんだ」

からかう様に千秋が言つと、荻野は首を竦めた。それから千秋の服装を見て、感嘆の息を吐いた。「君のほうは、随分気合が入つているみたいだね」

「当然です。お祭りですよ。」
「」
千秋は撫然としてため息をこぼすと、気を取り直すように衣の袖を引っ張つた。「それよりどうですか。お母さんに着付けてもらつたんですけど、可愛いですか？」

「まあ、馬子にも衣装、というしね」

「ここには、たとえ嘘でも可愛いって言つておくところだと、思うんですけど」

千秋は今度こそがつくりと肩を落とした。荻野は申し訳なさそうに顔を歪めただけだった。

祭りは特筆すべきところのない小さな物だった。屋台も二十をわずかに超す程度しか出ていなかつたし、九時ごろに上がるはずの花火も三千と少ししか用意されていないという話だった。有り体に言えば、千秋の興味を引くような物はあまり無かつた。

そのお陰と言うべきか、千秋は荻野がどこか落ち着きなくそわそわとしている事に気が付いていた。しかし千秋はそれを指摘しなかつた。そうした方が良いような気がした。

「向こうの、神社のほうに行かないか」

九時少し前になつて、荻野が言つた。いつも通りを装つていたが、無理に笑みを浮かべようとしているのが何となく分かつた。千秋は頷いて領承した。

神社の周囲にはこじんまりとした提灯が幾つか点されていた。賑わいから少し外れただけだというのに、そこはとても静かだつた。荻野はゆっくりと石段を上り、備えつけられた木製のベンチに腰掛けた。千秋はそのまま立つていた。

「少し前、二一チエの超人について話した事があつたね」荻野は暫しの沈黙をそう言つて破裂してた。それから、にっこりと微笑んだ。

「実を言うと、僕は臆病者なんだ」

「は？」千秋は声を上げてから、顔をしかめた。「あの、話が読めないんですけど」

「まあ、聞いてくれよ。それでね、そんな臆病者な僕だけども、このままではいけないと思つたんだ。このまま惰性で生きていては、二ーチエの言つ『末人』になつてしまつゝとね。だから、生きる意味を探そうと思つた」

荻野はそこで息をつくと、千秋に座るよう促した。千秋はそれを断つた。余り露骨だつたせいか、彼はせん方ない様子で笑つた。「こにはね、僕の故郷なんだ」荻野は繁華な夜店を顧みながら言った。「あの本屋にも、良く通つた物だつた。昔のままで、少し安心したよ」卖れていないのも、昔のままだつたけどね、と荻野は微苦笑して続けた。

「だから、何が言いたいんですか」

千秋は苛立たしげに口を開いた。足元でカラランと下駄が鳴つた。また少し沈黙が下りたかと思うと、荻野は途端に泣きそうな表情になつた。

「どうしたら良いのか、分からんんだ。この町でなら何かを見つけられるかもしれないと思った。僕が育つたこの場所なら、答えをくれるのじゃないかと」

「それで、見つかりましたか、その答えは」

「いや」荻野は頭を抱えるようにすると、首を振つて答えた。「でも、二ーチエが……」

「二ーチエが、何です」カラランカラランと、下駄が抗議するように鳴つた。千秋は初めて、荻野に対して声を荒げていた。

「荻野さんはそればっかりです。二ーチエ、二ーチエ、二ーチエ。そこに自分の意志は無いんですか。聞けば、貴方が考えたのはこの町に来ることだけで、他は結局、何もかも他人任せじゃないですか。哲学なんてのはただの指標で、模倣するような物じやないはずでしょ。確かに二ーチエは凄いのかも知れない。無知で馬鹿な私の理解の範疇なんか、軽く超えてますよ。けど、私はそんなの知らなく

たって生きてるし、皆だつて、それぞれの価値観を持つて人生を歩んでる。超人だかツアラトウストラだか知らないけど、そんな物私には必要ない、クソクラエだつ

言い終わり、深く呼吸してから、千秋は罪悪感に駆られて顔をしかめた。荻野が二ーチェの思想を何かしらの支えにしている事は知つていたし、それに何より、感情のままに言葉を放つただけの自分を彼が縋るような目で見つめていたから。

「ごめんなさい」千秋は視線から逃げる場所を探すように目を泳がせた。屋台の賑わいの音が微かに聞こえて、それが羨ましかつた。

「私、帰ります。こんな事、言つつもりじゃ無かつたのに。本当に、ごめんなさい」

千秋は俯き気味に言つて、走り出した。浴衣のせいで足運びはぎこちなかつたが、振り返る事だけはしなかつた。ようやく上がりはじめた花火の音に追われるよう、人込みを搔き分けた。

夜が明け、千秋は陰鬱な気分のまま古本屋へと向かつた。荻野は今日来るだろうか、来たらどうしよう、何を言おう。考えは纏まらないまま、夕方になつて、結局その日、荻野は来なかつた。翌日、千秋は本を開いて気を紛らわせようと考えた。しかし、ページを繰る手は進まず、簡単な本の一冊も読み終わらない内に、日暮れになつた。荻野はやはり来なかつた。

次の日も、またその次の日も荻野は来なかつた。そうして日が過ぎて、千秋が古本屋で働く最後の日になつた。夏の旅行に出ていたお上さんたちが帰つてきたのだ。

「有難うねえ、千秋ちゃん。すゞく助かつたわ。お客さんは誰か來たかしら」

彼女は人好きのする笑みを浮かべると、楽しそうに言つた。千秋は暗い気分を隠すように作り笑いを張り付け、答えた。

「はい。一人だけ……」

「あらあら、本当に来たの。どんな人だつた」

「夏なのに毎日ロングコートを着て、二ーチェの事になると急に饒

舌になるよつたな、ちょっとおかしな人でした」

「毎日ロングコートを着て、ねえ」彼女はおうむ返しに呟いた。それから、呟いてから気付いたと言つよつに首を傾げた。「那人、毎日こんな所に来てたの」

「そう、ですね」千秋は彼女の物言いに苦笑いで返した。「本人が言つには、昔この本屋に通つてたらしいんですけど」

「昔、この本屋に通つてた……」彼女はまたおうむ返しに呟くと、目を瞬かせながら千秋を見つめた。「その子、名前は荻野って言わなかつた」

「……はい。荻野正義って、言つてました」

「やつぱり！　あの子、本当に毎日ここに来ていたもの」彼女は千秋の返事に膝を打つと、心底嬉しそうに笑つた。

「マサくんつたら、帰つて来るなら連絡の一つくらいくれれば良いのに」

「あの、小母さんは、荻野さんと、親しかつたんですか」

「そうねえ、時々家でご飯を一緒にしたりするくらいには、親しかつたと思うけど」

「それじゃあ」千秋は小さく喉を鳴らした。口の中は少しばかり渴いていた。「荻野さんの家の場所とか、知つてたりは……」

「住所なら」彼女はちょっと考える仕種を見せると、一方を指差した。先日祭りがあつた方向だつた。「あつちの方に古い木造のアパートがあるんだけど、前はそこに一人暮らししていたわ。そこでないなら、実家に行つてるんじゃないから」

「そのアパートつて、神社の少し向こうにある小さなあれですか」

「そうよ。それがどうかしたの」

お上さんがそう言つたとき、千秋はもう上の空だった。一言二言と会話を続けたよつた気がしたが、それがどんな内容だったのか、

全く分からなかつた。気がつくと、千秋は神社の石段の前で息を切

らして立っていた。

時は夕暮れを刻み始めていて、空は少しづつ帳を降ろしていく。千秋は睡をぐくりと飲み込んで、石段を登りはじめた。この先に彼は居るだろうと、妙な確信があった。

果たして彼は居た。千秋が怒鳴りつけた時と寸分変わらぬ場所に、秘やかに座っていた。違ったのは、彼がいつものようにロングコートを羽織っている事だけだった。

千秋は彼に歩み寄りながら、心臓が激しく鼓動しているのを感じた。何かを言つべきなのは分かつていたが、何を言つべきかが分からなかつた。

「あの、荻野さん……」

それつきり、千秋は言葉を発することが出来なくなつた。祭りの時よりも耳障りな静寂は、荻野が口を開くまで続いた。

「あれから」荻野は千秋を見ることなく、心の内をじぼじぼと語つた。「あれから色々

考えてみたんだ。だけど、やつぱり僕は、一ーチュを捨てられそうにはないよ」

そして荻野は笑つて千秋を見た。だが、千秋には荻野が泣き出しそうなように思えた。いつか見せた今にも泣きそうな顔よりも、その笑顔はもつと弱弱しく見えた。

「私も、あれから考えてました」千秋は絞り出すよつに言った。「ずつと、ずつと……」

それから顔を伏せて、唇を噛み締めた。荻野が隣に座るよう勧めてきたが、千秋は首を振つてそれを断つた。何故だか鼻の奥のほうがつんと痛んだ。

「……駄目だね」荻野が言つた。「じついう時に何を言つたら良いのか、全然分からないよ。一体、どうしたら良いんだろうね」

「それを、私に聞きますか」

千秋は思わず小さく笑つてしまつた。目頭が熱を持つて視界が滲んだが、荻野が困つたような顔をしたのは、なんとなく分かつた。

「仕方ないだろ?」荻野は拗ねたような口調

で言つた。

「二一チエは教えてくれないんですか。」うつ時の上手い切り抜け方とかは

「君は、思つていたより意地悪だね」

「そうだつたみたいですね。私もびっくりです」千秋は目元を拭いながら言うと、大きく息を吸つて空を見上げた。木が邪魔をして、ほとんど見えなかつたけれど。

「仕方がないから、私が教えてあげます。女の子に対する態度についてとか、色々、言いたい事もありますから」

「それは……」荻野は何事かを言おうとして言葉を飲み込んだ。「いや、それじゃあ、お願ひしようかな」

「私は厳しいですよ。スバルタ人もびっくりなくらい。それでも良いですか」

「できればお手柔らかに頼むよ」

荻野は、穏やかに笑つた。千秋も釣られて笑い、それから、言つた。

「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3557w/>

純潔であること

2011年9月5日15時10分発行